漱石の哲学的作品

Junko Higasa

夏目漱石は以下の三作品に哲学の流れを作って、それを一組の親子に演じさせた。『吾輩は猫である』の金田富子と母親。『草枕』の那美さんと父親。『虞美人草』の藤尾と母親。いずれの親子も当時の日本の国家(親)と個人(子)の代表である。これらの作品は女性の社会的発展の軌跡であるとともに、急激な発展を遂げてから疲弊するまでの日本社会の軌跡でもある。個性を発揮し始めた女性：金田富子→個性を発展させてゆく女性：那美さん→間違った個性を誇示する：藤尾。他人より多くの利益を得ようとする競争社会→利益維持の保身に傾く社会→欲によって崩壊に向かう社会。漱石はこの三作品を通して、西洋文明の模倣により急激に発展した社会の栄華が長く続かないことを示唆した。また国がいかに権力によって個人を抑圧・制御するのかも。明治生まれの漱石には男尊女卑的傾向はあるが、彼は決して女性の社会進出を阻む者ではなく、社会での共存を目指した人物である。互いに同じ人間として「自己を高めること」を考えた。そしてその個性を発揮することが人間の在り方だと思っていた。抑圧に屈しない良心を持つ個性の発展―それは正しい社会を作り、正しい国家を作る。

■『吾輩は猫である』―ギリシャ哲学

「大きい女より小さい女を嫁にもらえ」というのは個人・社会共に「災難は小さいに限る」という比喩である。漱石が英文で書いた『女ノ水泳 Cordova』にある通り、漱石は「女性」を徹底解明し、文学として著すことを決意した。

■『草枕』―ゲーテの哲学および東西の宗教観

スターンは『自己の良心の命令に代わる外界の権威である神』に自分の意識を託した。しかし引き受けてくれる神を持たない画工は、自己の意識を泥溝に棄てた。自然(神)と一体になるべく石段を上り、自己の実現をする無意識の中へついに上り詰めた。更に観海寺の和尚を通して「無知なるものが最も善人である」という原理を表現した。

また、人間社会の在り方として、西田幾多郎氏の言葉を借りれば＜絶対の満足を与えるものは「自己の個人の実現」である。それは利己主義とは違う個人主義であり、言い換えれば共同主義である。個人が意思を持ち充分に活動することによって社会が成立し、それが国家の姿となる。従って個性を発達させること即ち社会・国家の発展である＞「人でなしの国」とは「自分の意見を持たない国」である。

■『虞美人草』―レオパルディの哲学

藤尾を殺したことは、すなわち社会の疲弊を殺したことである。最終章で甲野欽吾が哲学を語る場面は、後世のチャールズ・チャップリンの『独裁者』という映画でヒットラーに間違われた男の代替演説を思い出させる。最後の数分の真実に凝縮された人間の在り方。この最終章に『虞美人草』に人生の喜劇を描いた真意が込められる。

この作品にはレオパルディの『イタリアに寄す』という詩が重なる。それは疲弊した国家を救うために筆を執るという内容のもので、レオパルディのごとく「独りで行き着くところまで行って斃れるのだ」という漱石の決意が現れている。　(2013.5.4)